昭和戦前期の仏教洋楽に関する一考察（Ⅱ）
――日本佛教童謠協會と江崎小秋の活動を中心に――

福　本　康　之

Ⅰ．序
Ⅱ．日本佛教童謠協會の設立
　1．設立時期について
　2．江崎小秋の役割
Ⅲ．活動内容と時期区分
　1．仏教童謡と『佛教童謠曲譜と遊戯』の発行
　2．仏教洋楽と機関誌『新佛教音樂』の発行
　3．『興亞佛教國民唱歌集』の発行と活動停止
　4．活動内容と時期区分に関する総括
Ⅳ．組織構成と社会的位置づけ
　1．第1期――『日本佛教童謠集』と『佛教童謠曲譜と遊戯』から
　2．第2期――『新佛教音樂』から
Ⅴ．日本佛教童謠協會の刊行物に収録された作品
　1．『日本佛教童謠集』に収録された作品
　2．『佛教童謠曲譜と遊戯』と『新纂佛教幼稚園唱歌遊戯』に収録された作品
　3．『新佛教音樂』と『佛教音樂全集』に収録された作品
　4．日本佛教童謠協會の仏教洋楽史における位置づけ
Ⅵ．佛教音樂協會の活動停止について
Ⅶ．まとめ

Ⅰ．序

明治期以降，日本の仏教界では，西洋書法による音楽（以下「仏教洋楽」[1]と記す）が積極的に導入されていった[2]．そして昭和戦前期には，「佛教音楽協會」の主導による「佛教聖歌運動」が盛んになる．このムーブメントは，「佛教音樂協會」から発表された「佛教聖歌」作品の質や同協会の活動規模など，さまざまな観点から，仏教洋楽史においてエポックメイキングなものであった[3]．

だが，この「佛教聖歌運動」だけが，昭和戦前期の仏教洋楽界をリードするものであったのだろうか．当時の仏教洋楽に関する資料収集を進めるうちに，仏教洋楽に関するムーブメントの痕跡が，もうひとつ確認された[4]．「日本佛教童謠協會」の主導で展開された「新佛教音樂運動」が，それである．このムーブメントもまた，その規模から，「仏教聖歌運動」と比肩しうるものと見てよいであろう．そして，このムーブメントもまた昭和戦前期の仏教洋楽において，何らかの影響力を持ったものであった可能性が考えられる．

本稿は，前稿「昭和戦前期の仏教洋楽に関する一考察（Ⅰ）――『佛教音楽協會』と同協会京都支部の活動を中心に」[5]に続き，「日本佛教童謠協會」とその活動を中心に，昭和戦前期における仏教洋楽運動の一側面を，明らかにしようとするものである．

1）日本佛教童謡協會および江崎小秋は，「新仏教音楽」の名称を用いていたが，本稿では，筆者の研究で用いている統一表記として「仏教洋楽」の語を用いる．
2）福本：2001-2：pp.16-17参照．
3）福本：2001-2参照．
4）福本：2002参照．
5）福本：2001-2参照．

なお，日本佛教童謠協會より刊行された関連資料については，以下の資料が確認されている．

1)『佛教童謠曲譜と遊戯』2期全16冊[6]
2) 機関誌『新佛教音樂』全28号[7]
3) 同協会，関連団体による刊行物[8]
4) その他各種メディアに見られる同協会に関連の記事（『中外日報』紙ほか）

※これらの資料についての調査報告は，拙者別稿[9]を参照されたい．

ではまず，これらの資料を参考に，佛教童謠協会設立の経緯から見ていこう．

Ⅱ．日本佛教童謠協會の設立

1. 設立時期について

日本佛教童謠協会の設立に関する一次資料は，現時点で確認されていない[10]．

二次資料としては，同協会発行の機関誌『新佛教音樂』第26号(注11)に掲載された江崎小秋[12]の記事[13]等が，今回の資料調査より，確認された．江崎は，同記事中で，日本佛教童謠協會の誕生を，昭和元年と回想している[14]．

さらに，同協会の名称が確認される最も古い資料『日本佛教童謠集』[15]の奥付には，「昭和二年十月廿五日印刷　昭和二年十一月二日發行」と記されている．昭和元年が，大正天皇の死去に伴う改元で，1週間足らずであった[16]ことを考えれば，この『日本佛教童謠集』の出版は，同協会の最初期の事業ということになる．ただし，これは少なくともこの時期までに，同協会が何らかの形で存在していたことを示すものでしかない．そこで次に，同協会の設立に，中心的役割を果たしたと思われる人物について，見ていくことにする．

2. 江崎小秋の役割

前述の記事より，同協会は，仏教音楽に理解を示していた高楠順次郎[17]の提言を受け，江崎が中心となり結成されたものであることが確認される．また，『日本佛教童謠集』や同協会の機関誌『新佛教音樂』には，編集者として江崎の名が記載されており，さらに同協会の刊行物（『佛教童謠曲譜と遊戯』など）

6) 同誌第2期第8輯には「第九輯も大略編輯が出來上つた」との記載が見られる．しかし，『興亞佛教國民唱歌集』(1939年発行）の広告などから，実際に第9輯は刊行されず，第8輯で終わったことが確認された．さらに，第1期第6輯に掲載された予告では，第2期も当初の計画では第1期同様，全8輯の予定であった．また，それと並行して，第1期で掲載できなかった振付を集め，『佛教童謠舞踊集』第8輯の別輯として刊行する予定とされている．
7) 同協会発行の『興亞佛教國民唱歌集』には，第29巻までの発刊が記されている．しかし，現物の存在は確認されておらず．本稿では，確認された第28巻までを資料として扱う．ただし，第12，24，25巻についても，現物の所在は確認されていない．資料については，福本：2002を参照のこと．
8) 本稿執筆時点で，以下の資料を確認．
『日本佛教童謠集』／『新纂仏教幼稚園唱歌遊戯』上巻／『佛教音樂全集』第1巻／『佛教音樂全集』第4巻／『江崎小秋歌謡選集』／『興亞佛教國民唱歌集』
詳細については，本稿末【日本佛教童謠協會関連文献】を参照．
9）福本：2002参照．
10) 注9) 参照．
11) 1936.10，日本佛教童謠協會発行．
12) 江崎小秋（1902 岐阜－1945 東京）：農家の長男として生まれ，当初薬剤師を目指すが，叔母しずゑの勧めにより詩人に転向．1919年よりしずゑの夫伊豆宥法師につき仏教を学ぶ．1920年より，一時簿記や英語の体得も目指すが，1921年日本大学美学科に入学，美学を専攻．翌年，関東大震災のため同大学を退学し，小林正盛主宰の雑誌『飲光』編集助手となる．また，並行して，勝田香月や井上康文，宵島俊吉らと雑誌『京傷』を発行．
1923年より伊豆と『佛教童話と童謠』を刊行．このとき初めて「佛教童謠」の名称を用いる．1926年，『佛教童話と童謠』の廃刊に伴い，伊豆の佛教出版社を退社．その後日本佛教童謠協會を設立．
1945年，東京大空襲により死亡．「江崎主一（『日本佛教童謠集』の編集者名として使用)」は，江崎のペンネーム．
13) 江崎：1936参照．
14) 江崎：1936：p.22参照．
15) 本稿末【日本佛教童謠協會関連文献】参照．
16) 1926.12.25大正天皇死去．

も江崎の名で編集発行されている．それらの刊行物の中で江崎は，同協会の主導的な立場での発言[18]を行ってもいる．こうした事実より，同協会の設立と運営は，江崎が中心となっていた，と考えてよいであろう．

また，『日本佛教童謠集』に掲載された江崎の記述「佛教童謡と私―『日本佛教童謡集』の序にかへて」[19]には，以下のようにある．

・・・遂に私は大正十三年三月三月一日を期し、同士と貧しいながら研究雑誌『佛教童話と童謡』[20]を創刊して、佛教童謡の普及と研究の運動を始めたのでありました。・・・(中略)・・・遂に十五年七月號を發刊したのみで、休刊するの運命に結びついてしまいました。(江崎：1927)

ここで触れられている『佛教童話と童謡』とは，江崎が伊豆宥法[21]とともに発刊した雑誌である．その中に「日本佛教童謡協會」の名は見られない．また江崎は，この雑誌を自らの佛教童謡研究発表の場であった，と述べてもいる[22]．

加えて，『新佛教音樂』の創刊号に掲載された江崎による記事「新佛教音樂運動拾年の跡（一）」[23]には，次のようにある．

・・・「よし、自分は佛教歌謡を研究しやう」と、ついに此の方面の研究を行ひ出した。それから早くも拾年の歳月を迎え、あと二三ヶ月で拾壱年目にならんとしている。・・・中略・・・今の教育は児童を殺伐にするのだ。と、此處に児童に歌唱さすべき情操教育歌としての佛教童謡の重大使命があった。・・・(中略)・・・そして新佛教音樂運動は俺の仕事だ。俺がやるんだ。俺じゃなければ出來ないんだ。と先づその運動の前提として大正一三年のは春、小さい雑誌を發刊し始めた。(江崎：1932：pp.11-13)

この号の発行が1932年の10月[24]であるから，江崎が仏教童謡の研究を開始したのは，1923年という計算になる．したがって1年間の準備をへて，1924年より『佛教童話と童謡』が発刊されたことになる．

さらに，江崎は『新佛教音樂』26号[25]において，次のようにも述べている．

・・・「児童の愛誦する童謡にも古來から日常の宗教的生活に即した歌謡はあった。宗教的陶冶は斯かる宗教的色彩ある童謡の提供に俟たねばならない」――と、昭和元年、文學博士高楠順次郎氏の發言に依り江崎小秋は日本佛教童謡協會を設立・・・(江崎：1936：p.22)

おそらく，仏教童謡というジャンルにおいて活動の場を失った江崎[26]が，高楠の助言によって，日本佛教童謡協會を『佛教童話と童謡』誌に続く佛教童謡研究の発表の場とすべく，その設立に踏み出したのであろう．つまり同協会は，江崎によって設立された，仏教童謡を中心とした仏教洋楽団体という一面を持つことになる．

そして，同協会の設立も，この『佛教童話と童謡』休刊後[27]の大正15（1926）年後半から，昭和2（1927）年にかけての時期と推定され，江崎自身が述べる昭和元年とほぼ一致する．『日本佛教童謡集』の刊行についても，

17）東京帝国大学教授文学博士．西本願寺普通教校在学時に「反省会」を結成し，『反省会雑誌』（現『中央公論』，中央公論社）を刊行．同志の櫻井義肇による仏教洋楽運動に共鳴し，東京帝国大学仏教青年会館において，ルンビニー合唱団結成にたずさわる．また，佛教音樂協會においても理事（福本：2001-2：p.22）を務めるなど，仏教洋楽運動に積極的にかかわるが，『大正新修大蔵経』（1924-1934，大正一切経刊行会刊）編纂への参加により，次第に疎遠となる．
18）江崎：1936，福本：2002参照．
19）江崎：1927参照．
20）注12）参照．
21）仏教研究家．注12）参照．
22）江崎：1927：p.2参照．
23）江崎：1932参照．
24）本稿末【日本佛教童謡協會関連文献】参照．
25）江崎：1936参照．
26）『佛教童話と童謡』の廃刊．
27）注12）参照．

前述のとおり，同協会最初期の事業と見てよいであろう．

Ⅲ．活動内容と時期区分

こうして始まった，日本佛教童謠謡協會の活動は，『日本佛教童謠集』で江崎が述べている[28]ように，一貫して仏教童謡を中心にすすめられたものであったのだろうか．でないとすれば，同協会の活動は，いつごろどのように変わっていたのだろうか．本章では次に，その活動内容と時期区分に関して，考察していくことにする．

1．仏教童謡と『佛教童謠曲譜と遊戯』の発行

前章において述べたように，日本佛教童謠協會の最初期の活動に『日本佛教童謡集』の刊行が確認される．しかし，同書の刊行後約2年間に，刊行物があったことを示す資料はない[29]．そして1929年8月，同協会は『佛教童謠曲譜と遊戯』の発行を開始する．同誌の第1輯には，協会の活動に関して，次のような記載[30]が見られる．

【日本佛教童謠協會の事業】

一、「佛教童謠曲譜と遊戯」全八冊刊行[31]

二、 新佛教音樂[32]の普及と實際指導[33]

三、佛教童謠遊戯[34]の普及と實際指導

四、日校[35]兒童の佛教童謠創作實際指導

五、佛教各團體の會歌、校歌、園歌等の創作、作曲[36]

六、日曜學校、幼稚園設立に關する相談[37]

七、演奏會、講習會、童話會等の講師派遣[38]

八、兒童圖書代理購入及宗教教育圖書出版[39]

ここで，『佛教童謠曲譜と遊戯』の発行は，同協会の一番の事業に挙げられている．また同誌の刊行は1932年12月の第2期第8輯[40]まで，3年4ヶ月，全16冊に及んでおり，その各輯に記載された事業内容も，基本的には変わっていない[41]．その間，同協会の活動の中心は，『佛教童謠曲譜と遊戯』の発行におかれていたと考えられる．また，前章において筆者は，江崎が研究の場として日本佛教童謠協會の設立に動いたと考察した．この雑誌の刊行という事業は，おそらくかつて江崎が研究成果発表の場として伊豆とともに『仏教童話と童謠』を発行していた経験に基づいていると思われる．

28）江崎：1927参照．

29）次の刊行物は，1929年8月の『佛教童謠曲譜と遊戯』第1輯で，約2年弱の期間が存在する．

30）『佛教童謠曲譜と遊戯』第1輯，1929.8，日本佛教童謠協會，非売品，奥付．を参照．

31）第1期分のみを指す．当時，第2期分の刊行については，未計画であったと考えられる．

32）この時期，江崎のいう「新仏教音楽」すなわち，仏教洋楽全般に関する運動を，同協会が展開していたことを示す資料は確認されていない．仏教童謡も，その一ジャンルではあるが，次項に別途記載されていることを考えると，一応児童向けの童謡に関しては，別に考えていたと思われる．

33）実際の指導については，後の機関誌『新佛教音樂』で，同誌発行時期に行われていたことが確認できるが，この時期に行われていたことを示す資料は，現時点では確認されていない．

34）ここでいう「遊戯」は，その掲載内容からして，「舞踊」をさすものと考えられる．

35）日曜学校のこと．戦前期の寺院において，現在の幼稚園にあたる徳育教育の場として開校されていた．ただし，日曜学校そのものには，廃仏毀釈運動による信者減少をうけた，「布教の場」としての機能もあった．

36）これらの活動に関しても，同時期の実際の活動を確認できる資料は無い．

37）注36）に同じ．

38）注36）に同じ．

39）現物は未確認ながら，『興亞佛教國民唱歌集』（本稿末【日本佛教童謠協會関連文献】参照）に，この類の書籍が発行されたことを示す広告が確認される．ただし，時期的には第2期（『新佛教音樂』刊行時期）の可能性も考えられる．

40）注6）参照．

41）変更点は以下のとおり．

「一、「佛教童謠曲譜と遊戯」第二期全一二冊刊行」

「四、佛教民謠舞踊の普及と實際指導」

2. 仏教洋楽と機関誌『新佛教音樂』の発行

『佛教童謠曲譜と遊戯』の最終号となった第2期第8輯の刊行[42]と前後して，同協会からは，新たに機関誌『新佛教音樂』が創刊される．創刊号の表紙裏に掲載された広告では，『佛教童謠曲譜と遊戯』との並行出版の旨が述べられているが，『佛教童謠曲譜と遊戯』は機関誌の創刊後，第2期第8輯を最後に休刊となっている．『新佛教音樂』では，仏教童謡や楽譜の発表も行われており，おそらく内容的な重複や財政的な問題[43]から，『佛教童謠曲譜と遊戯』の発行は打ち切られたと考えられる．

そして，新創刊された『新佛教音樂』の創刊号[44]にも，以下のとおり，同協会の事業内容が記載されている．

【日本佛教童謠協會の事業】

一、本會は、新佛教歌謠[45]、新佛教音樂、新佛教舞踊[46]の創成と普及を目的としその樹立を期す[47]。

一、本會の研究發表は總て「新佛教音樂」誌上、並に圖書として刊行頒布す。

一、本會は、随時左［原書は縦書きのため下記内容を指す］の會を開催す[49]。

A　佛教音樂舞踊大會

B　佛教音樂舞踊講習會

一、本會は左附帯事業を行ふ。

A　佛教各團歌、校歌、園歌等の創作、作曲。

B　各種講習會の講師派遣。

C　兒童教化施設の相談。

D　各種教材圖書の代理販売。

E　各種圖書の出版と印刷。

この内容は，『佛教童謠曲譜と遊戯』に掲載されたもの[50]とほぼ同じで，一見すると同協会の活動方針は，基本的に変わっていないと考えられる．しかし，「仏教童謡」に関する記述だけが無くなっている点には，注目しておきたい．そこで，『佛教童謠曲譜と遊戯』と『新佛教音樂』の内容を比較してみる．

『佛教童謠曲譜と遊戯』には，仏教童謡の楽譜と振付けが掲載されており，同誌は実質的に「振付つき楽譜集」である．また，掲載されている仏教童謡作品は，その名のとおり全てが児童向け[51]である．これは，江崎がかつて伊豆と『仏教童話と童謡』を出版したころより重要視していた「児童向けの仏教童謡の必要性」という基本方針によると思われる．それに対し，『新佛教音樂』の創刊号においては，児童向けの作品や児童をテーマとした論考も発表し続けているのに加え，舞踊音楽作品に関する論考[52]の掲載や各宗派の仏教音楽事情の報告[53]など，対象年代を児童に限定せず，広く仏教洋楽やその関連分野が取りあげられている．もっとも，仏教洋楽全般についての言及は『佛教童謠曲譜と遊戯』に記載された事業内容にも見られることから，当初より念頭にはあったと考えられる．機関誌というメディアを得て，ようやく仏教童謡だけではなく，全年代を対象に，新仏教音楽全体を活動の対象として扱えるようになったので

42）1932年12月，本稿末【日本佛教童謠協會関連文献】参照．

43）『新佛教音樂』創刊号の編集後記には，それまで雑誌の刊行を見合わせていた理由として，財政的な問題のためと記されている．

44）本稿末【日本佛教童謠協會関連文献】参照．

45）一連の江崎による記述（江崎：1927，1932，1936）や『新佛教音樂』誌での使われ方から，この言葉は，仏教に関連する詩をさしていると考えられる．

46）仏教洋楽（江崎のいう「新仏教音楽」）を伴奏とする舞踊をさす言葉と考えられる．

47）「新仏教歌謡」も「新仏教舞踊」も，新しいジャンルの仏教音楽である「新仏教音楽」の言葉に合わせて，「新」と付されたにすぎないと思われる．

48）これらの事業に関しては，『新佛教音樂』誌上で，その開催が確認される．

49）注48）同様，これらの事業に関しては，『新佛教音樂』誌上で，その開催が確認される．これらの活動については，稿を改め論じたい．

50）本稿Ⅲ．1．参照．

51）ただし，特集号としての第1期第8輯は，児童向けではない他団体既発表作品を転載．

52）藤澤衛彦「盆踊り作者と盆踊りの變遷」：『新佛教音樂』創刊号，pp.18-21.

53）五線氏［ペンネーム］「各宗の新佛教音樂界のぞ記（一）」：『新佛教音樂』創刊号，pp.26-27.

はないだろうか.

また同誌に掲載されている事業内容についても，第27号（1937年4月）まで（第28号には掲載なし）変更はない.

ここで筆者は，これを同協会の一つの転換期と考え，この点について検討してみたい. その参考として，『新佛教音樂』に見られる江崎の論考[54]の一部をここに引用しておこう.

> 私は遂に、「新佛教音樂」誌を發刊して，今から第二期に向はんとして軍馬を進めている（江崎：1927：p.14）

また，『新佛教音樂』の編集後記[55]には，

> 私の詩作拾年を記念する意味で發刊しだした.（『新佛教音樂』創刊号，p.48）

『新佛教音樂』創刊に関する記述は，上記2点のみが確認されている. この2つの発言を総合して読むと，江崎のいう「第二期」とは，単に自身の活動を10年一区切りとして，次の10年に入ったというだけの意味でしかない.

しかし『新佛教音樂』の発行により実際同協会の活動範囲は，一段と拡大している. その意味で，筆者はこの『新佛教音樂』創刊以降を，江崎と同協会の仏教洋楽運動の第2期と位置づける.

さらにこの第2期，『新纂仏教幼稚園唱歌遊戯』全2巻[56]や『佛教音樂全集』全10巻[57]の刊行が開始（それぞれ1931年，1934年）されるなど，同協会による「新佛教音樂運動」[58]は，他の組織団体[59]と連携をとる形で，活発に展開されていった. こうした活動は，この時点までに同協会が，日本の仏教界において非常に広く認知されていたことを示すものである.

また1936年には，「江崎小秋詩作十周年記念會」[60]が設立され，日本佛教童謠協會と連携をとる形で『江崎小秋歌謡選集』[61]が刊行するなど，同協会の「新佛教音樂運動」は，最盛期を迎えることになる.

と同時に，『新佛教音樂』誌には，賀來琢磨や岡本義雄らが舞踊講習会を各地で開催していることが，報告されている. このように，全国的な実地活動を伴なっていることも，第2期の新たな展開である.

3.『興亞佛教國民唱歌集』の発行と活動停止

だが，この『江崎小秋歌謡選集』刊行後まもなく，同協会の活動は，空白期を迎える. 『新佛教音樂』第28号発行以降，『興亞佛教國民唱歌集』の発行（1939年12月）までの2年2ヶ月の間，同協会から発行された刊行物は，一切確認されていない. また，その存在を示す広告などの資料も現時点では確認されていない. さらに，全10巻と予定された『佛教音樂全集』も第1，4巻（2冊）のみの発刊でストップ[62]している. その他，各種メディア（『中外日報』紙[63]など）にも，同協会に関する記事もない. これはどうしたことであろうか.

『興亞佛教國民唱歌集』については，江崎次のような編集後記が見られる.

> ・・・財團法人佛教聯合會[64]が興亞開發のために歌曲撰定を議せられた・・・(中略)・・・興亞の声に應へんと・・・(中略)・・・今や日本佛教は再び満州、支那の民衆の胸

54）江崎：1927参照.
55）「小秋」の記名あり.
56）本稿末【日本佛教童謠協會関連文献】参照.
57）本稿末【日本佛教童謠協會関連文献】参照. ただし，刊行は第1，4巻の2巻に終わったことが，『興亞佛教國民唱歌集』（本稿末【日本佛教童謠協會関連文献】参照）の広告より確認される.
58）同協会による仏教洋楽運動を江崎の論考（江崎：1932）にちなんで，本稿ではこう呼ぶことにする.
59）『新佛教音樂』には「仏教連合会後援」とされ，掲載された「仏教聖歌」も，佛教音樂協會からの転載である.
60）『新佛教音樂』誌第26号表紙あと広告参照.
61）本稿末【日本佛教童謠協會関連文献】参照.
62）注57）参照.
63）当時日本最大の宗教専門日刊紙.
64）1915年に結成された日本の仏教界を代表する組織. 戦時体制下の1941年，大日本仏教会に改組される.

に甦りつゝあるの時、先づ幼稚園で、日曜學校で、或ひは日本語を學ばんとする大陸の青年男女は此の歌曲に依り、必ずや新しき感激を頬に輝かすであらう。以上が編纂の主眼であるが・・・（『興亞佛教國民唱歌集』,「編纂の辯」[65] より）

また，この曲集には，それまで同協会が用いることのなかった「國民唱歌」という名称[66]が付けられた．さらにその作品の多くは，仏教（的）音楽[67]ではなく，タイトル[68]から，大東亜共栄圏の実現という大義名分のもとで行われたアジア侵略を推進するもので，当時の国民国家のあり方に影響を受けたものであることがわかる．したがって，この『興亞佛教國民唱歌集』の刊行は，日本佛教童謠協會の第2期までの活動方針と異なるものである．また，この曲集以降に，同協会から発行された刊行物や，メディアにおける同協会関連の記事も確認されていない．

よって，日本佛教童謠協會の活動は，『新佛教音樂』第28号を刊行した1937年7月以降，戦時体制下において活動方針が変更されたか，あるいは前術のようにその他の理由によって活動そのものが停止状態になったかのどちらかである．仮に活動方針が変更されたとしても，その成果は，『興亞佛教國民唱歌集』の刊行以外にはなく，実質的に1937年の中ごろより，活動停止状態となったと見る方が妥当であろう．

4. 活動内容と時期区分に関する総括

以上より，日本佛教童謠協會協會の活動は，『佛教童謠曲譜と遊戯』において，児童（あるいはその教育担当者）を対象とした仏教童謡（とその振付）を発表した第1期，『新佛教音樂』において，仏教洋楽全体を対象とした作品及び論考を発表した第2期に，区分される．場合によっては，『興亞佛教國民唱歌集』の刊行を，第3期と見做すことも可能であるが，前述のような同曲集の性格から，本稿では対象外としておく．

このような活動例は，音楽作品を媒介として，当時の仏教界や音楽界が，政府とどのような関係にあったかを読むにあたって，非常に興味深い事例であるが，その点については，また別の機会に論じたい．本稿では，上記のような理由から，この第1期と第2期を研究の対象範囲として，次に，同協会の組織体制を見ていくことにする．

IV. 組織構成と社会的位置づけ

本章では，前章で明らかにした2つの時期の活動を支えた，同協会の組織構成とその関係者について考察する．

1. 第1期――『日本佛教童謠集』と『佛教童謠曲譜と遊戯』から

日本佛教童謠協會の活動のうち，第1期の組織体制を記録した資料は，現時点で確認されていない．しかし，その一部は，いくつかの資料より確認できる．

既に述べたように，同協会の設立は，高楠の提案により江崎が中心となっていた．同協会最初期の刊行物である『日本佛教童謠集』にある江崎の記述[69]には，下記の人物の名が確認される．

野口雨情　蘆谷蘆村　藤澤衛彦　武田豊四郎　弘田龍太郎　高楠順次郎　野間修　粟津観禄　菅原霞村　長岡慶信（以上10名，登場順，江崎：1927：pp.1-14）

このうち野口と弘田は，寄稿された作品で，蘆谷と高楠は序文で，それぞれ詩人，作曲家，仏教者としての関与が確認される．しかし，他の人物に関しては，どのような関係にあったかは不明である．ただし，藤澤については，のちに『新佛教音樂』において，顧問として

65）頁数記載無し．
66）ただし，江崎による興国的作品は，《海洋少年》（作詞：江崎小秋，作曲：山口保治，『新佛教音樂』第14号掲載）など，後期の『新佛教音樂』誌に数点確認はされる．
67）広く仏教を素材とした音楽全般をさす．
68）福本：2002収録資料参照．
69）江崎：1927参照．

記載されている（後述）ので，おそらく高楠同様，江崎の支援者となっていた可能性が考えられよう．

武田や粟津，菅原，長岡についても，その人物像について，現在のところ確認が取れていない．また，以後の日本佛教童謡協會発行の資料にも名前は見られない．同協会の設立を，江崎が突然思い立ったのではなく，伊豆との活動[70]の延長にあることを考えれば，これらの人物は，そのころからの関係者であった可能性も考えられる．こうした点についての解明が，より一層日本佛教童謡協會の初期の姿を明らかにしてくれるであろう．同協会設立以前の江崎の活動については，今後の課題とし，稿を改めたいと思う．

次に，第1期の関連人物を推定する資料として，『佛教童謡曲譜と遊戯』が挙げられる．そこに現れる名前の多くは，発表作品の作曲者と作詞者，振付担当者のものである．発表された作品はいずれも新作であり，また公募によるものではないため，それらの人物については，同協会との（あるいは江崎との）関係が，比較的深いと考えられよう．以下にその一覧を示しておく[71]．

作曲者：室崎琴月　長妻完至　藤井制心　吉川孝一　本多鐵麿　小松平五郎　小松清　跡部晃　深澤一郎　本間憲一

作詞者：江崎小秋　青柳興敬　田中豊春　吉續豊明　興林秀夫　岡部光明　鈴本海秋　新道高明　渡辺千秋　日高紅春　鶴谷隆起　櫻井佐賀恵　羽生田鳥衣　西山武子　林省三　山田文雄　武井孝子　安藤徇之介

振付：賀來琢磨　岡本義雄　タンダバハ舞踊研究所[72]

※第1期第8輯に掲載された作品の作詞作曲者については，その作品が「各宗祖始讃仰歌特集」として，仏教各宗派の既成発表作品を転載したものであるため，除外した．

このリストにある人物は，その多くが他の方面での活躍を確認されており，毎号寄稿しているわけではないため，同協会の専任であったとは考えられない．同協会第1期の中心事業におかれた『佛教童謡曲譜と遊戯』の，ほぼ各号に名前が見られる江崎と賀來が，この時期の中心となっていたと推測される．また，作詞者の多くは，前掲『日本佛教童謡協集』に作品が採用されており，同協会の初期から関係があった（江崎の同人）と見てよいであろう．

また，本多や小松（平），小松（清），深澤といった作曲家は，当時日本の作曲界の第一線で活躍する面々であり，同協会から発表された作品についても，質の高いものと認識されていたと思われる．

さらに，彼らの作品は，佛教音樂協會からも発表されており，藤井においては同協会京都支部[73]において主導的な立場にあったことが確認されている．これらの事実からは，同じく仏教洋楽を中心に活動していた佛教音樂協會との関係を検討する必要性が，指摘されよう．それに比べて，作詞と振付のスタッフは，満足のいくものでなかったようで，のちに同人の募集（後述）が行われた．

その他，『佛教童謡曲譜と遊戯』第1期第8輯に挟み込まれた告知文書には，名前を挙げて，東京（赤松玄達，藤本幸邦，高木三郎）をはじめ，京都（波多野幸枝），大阪（關戸元峰），神戸（岸眞善）の各委員を推薦している．これは，第2期の特徴となった全国的な展開を，この段階（1930年）で，同協会が組織として，すでに計画していた（直接第2期の展開に結びついたかどうかは定かではないが）ことを示すものと考えられよう．

このように，同協会の組織は（特に作曲面において）非常に充実したスタッフによって構成されており，同協会の活動に対する研究

70）『佛教童話と童謡』の刊行．

71）『佛教童謡曲譜と遊戯』全2期16冊掲載作品のうち，現物が確認されなかった第1期第3輯以外のものについてのリストである．

72）賀來琢磨主宰の団体で，岡本義雄はその研究生．

73）福本：2001-2参照．

は，昭和戦前期の洋楽受容史の一側面を研究する上で，欠かせないものであると筆者は考える．

2. 第2期――『新佛教音樂』から

機関誌『新佛教音樂』の創刊号以降には，たびたびその役職と担当者名が一覧形式で掲載されている．そのため，第2期の佛教童謠協會の組織構成については，かなり詳しく知ることができる．ちなみに，創刊号に見られるその詳細[74]は，以下のとおりである．

【顧問】高楠順次郎※ 北原白秋 野口雨情※ 中山晋平 弘田龍太郎※ 藤井清水 宮城道雄 室崎琴月※ 藤澤衛彦※ 渡邊海旭 巖谷小波 印牧季雄
【客員】八百谷順應 小松平五郎※ 権藤圓立 小松清※ 長妻完至※ 塚本篤夫
【同人】賀來琢磨※ 笠原眞應 岡本義雄※ 深澤一郎※ 本多鐵麿※ 吉川孝一※ 青柳興敬※ 藤井制心※ 江崎小秋※
【委員】渡邊千秋※ 羽生田鳥衣※ 安藤徇之介※ 岡部光秋 大鹿照雄 小田俊夫 櫻井佐賀惠※ 林省三※ 興林秀夫※ 山田文雄※ 本多郁夫 安武英雄 中村松童 小島眞美 高田義人 日高紅椿※ 玉見雅夫 岡村益雄 西山武子※ 笠原壽々代 宇野隆保
〈『新佛教音樂』刊行部〉
【編輯問】弘田龍太郎※
【編輯同人】小松清※ 賀來琢磨※ 江崎小秋※

※は第１期にも名前が見られる人物

このリストより，第2期の同協会も，仏教者や詩人，作曲家，振付師によって構成されていることがわかる．そして，その多くは，第1期において，作品提供などのかたちで実際に同協会と関係した人物であり，ここからも前章で述べたような，第1期の方針を引き継いで第2期の活動を展開していった様子が伺えよう．ちなみに，この組織構成のあとには，全国の会員名が記されており，同協会がすでに全国展開をしていたことがわかる．

この組織構成は，その後「『同人』を組織し，同人は社會的に飛び出して活動出來るやうに育てたい」[75]という目的のため刷新される．新組織構成は，「顧問」以下「客員」，「理事」，「常任理事」，「歌謡部同人」[76]，「舞踊部同人」[77]，「研究部同人」[78]，「名誉会員」となった旨が，その担当者名と併せて，『新佛教音樂』第10号に発表された．

顧問に，堀内敬三[79]や中山晋平[80]など音楽面での新戦力を迎えたことや，3つの同人部門を設けた点は，同協会の意気込みが感じられる変更である．さらに『新佛教音樂』第17号からは「音学部同人」の記述が現れ，同人部門は4つとなる．若干の人員変更をのぞき，確認しうる最後の組織構成表（『新佛教音樂』第27号）まで，この体制は続いている．

ここで，この刷新によって，より一層浮き彫りになってくる特徴について述べておく．

この新体制の顧問には，小林一郎と伊藤精昭の名が見られる．小林は，同時期に文部省内に事務局を設置[81]し活動していた佛教音樂協會の常任理事であり，また，伊藤は同協会の常務主事である．そして，同協会が日本佛教童謠協會と同じ時期に，「仏教聖歌運動」という仏教洋楽の運動を展開していた[82]ことを考えると，こうした作品と直接の関係を持たない人物の参加は，佛教音樂協會との連携を強化することが目的であった，と推測され

74）『新佛教音樂』創刊號，1932.10，日本佛教童謠協會「新佛教音樂」刊行部，奥付（p.48）より2頁後（頁数記載無し）．

75）『新佛教音樂』第7號，1933.8，日本佛教童謠協會「新佛教音樂」刊行部，「編集後記」を参照．
76）詩の創作と詩人の育成．
77）舞踊の創出と舞踊者の育成．
78）各分野の研究者育成．
79）戦前から戦後にかけて活躍した音楽評論家で，作曲等も行う．
80）作曲家．
81）同協会は，各種刊行物に「文部省宗教局内」と記載しているが，正式な国家機関ではない．
82）福本：2001-2参照．

る．

『新佛教音樂』の刊行によって，同協会はその活動範囲を仏教洋楽全体へと拡げたと，すでに筆者は述べた．佛教音樂協會との連携は，同協会の活動を充実たらしめていくものであり，実際にも「仏教聖歌」が機関誌『新佛教音樂』に多数掲載[83]されている．ただし，筆者の調査によると，逆に佛教音樂協會の資料に，日本佛教童謠協會の名が見られることは，全く無い[84]．現時点でこうした両協会のあり方の理由を示す資料は確認されていないが，おそらく，「文部省内設置」を前面に出していた佛教音樂協會と，江崎が中心となって運営していた「私的」な日本佛教童謠協會の違いではないかと考えられる．

では逆に，仏教洋楽という同じジャンルを扱う2つの団体は，連携したにもかかわらず，なぜ合併に至らず並存し続けたのであろうか．見方を変えると，それは佛教音樂協會の存在にもかかわらず，日本佛教童謠協會が存在しえた理由を問うことになる．確かに，本章で明らかにした組織のあり方を見れば，同協会の組織力は，十分なものであることがわかる．では，同協会の存在「意義」とは，なんであったのだろうか．

次章では，日本佛教童謠協會の存在意義を，採り上げられた作品という側面から見ていくことにする．

V．日本佛教童謠協會の刊行物に収録された作品

本章では，佛教童謠協會で採り上げられた作品について検討を加える．同協会からの発表作品については，筆者が行った調査によって確認されたもののうち，前述（Ⅲ．3．）のような理由から『興亞佛教國民唱歌集』に収録されたものは，今回の研究対象からはずしておく．以下，具体的に同協会が採用した作品について見ていこう．

1.『日本佛教童謠集』に収録された作品

日本佛教童謠協會から最初に発表された，あるいは採り上げられた作品は，『日本佛教童謠集』に掲載された172点[85]である．これらは，出版物のタイトルにあるように，いずれも仏教童謠である．ただし，楽譜が付されたものは，弘田龍太郎作曲による《ののさま》と《花祭りの歌》の2点[86]であり，また児童の作品が17点も含まれている．これは，江崎が伊豆ともに発行していた雑誌が『仏教童話と童謠』であることを考えると，詩人としての立場から，音楽作品であることよりも，詩を中心とした「仏教童謠」の普及をもくろんでいたことを示すものと思われる．また，掲載作品についても，『仏教童話と童謠』で既に発表でされていた可能性が考えられる．

2.『佛教童謠曲譜と遊戯』と『新纂佛教幼稚園唱歌遊戯』に収録された作品

つづいて，本格的な第1期の成果発表の場となった，『佛教童謠曲譜と遊戯』では，未確認の第1期第3輯を除いて，82作品[87]の収録が確認された．それらは，日高紅春の《お寺の雀》[88]の1点と第1期第8輯の各讃仰歌を除けば，『日本佛教童謠集』と重複するものは無く，『佛教童謠曲譜と遊戯』は，基本的に新作発表の場でもあったと考えらよう．そして，そのほとんどが仏教童謠ではあるが，第1期第8輯のように全てが各宗祖師讃仰歌であったり，第2期では作品の区別が明記され，明らかに「民謠」や「唱歌」と分類されているものが数点（各輯1点ほど）[89]見られる．

これは，既に述べた同協会の活動のうち，この第1期には仏教洋楽を視野に入れつつも，仏教童謠にかなりのウエイトが置かれていた，また置かざるを得なかった状況を示しているといえよう．また，同時期に発行された『新

83）福本：2002参照．
84）福本：2001-1に挙げた資料を参照のこと．
85）福本：2002参照．
86）この2作品は，同曲集編纂に際し，弘田が作曲したものであると江崎は述べている（江崎：1927）．
87）福本：2002参照．
88）『日本佛教童謠集』に掲載ずみ．ただし楽譜は掲載されていない．
89）各輯目次のタイトル後に記載．

纂佛教幼稚園唱歌遊戯』（全2巻）[90]には，33作品[91]が収録されている．こちらはタイトルの示すとおり，仏教童謡ではなく唱歌である．しかし，それは仏教童謡と同じく児童を対象としたものであり，こちらも同協会の第1期の活動方針を示すものといえよう．

そうした，児童を対象とした作品は，単旋律に伴奏をともなうだけの形式で，佛教音樂協會から発表されていた「仏教聖歌（3あるいは4声による合唱形式）」に比べると，技術的に簡易な構造で，大正時代の讃仏歌と比べても大差はない．しかしこれは，対象が児童である以上，意識してのことと思われるのであり，また弘田龍太郎や藤井制心[92]という作曲家が同協会のスタッフとして名を連ねている以上，決して同協会の音楽的な質の低さを示すものではない．

また，ここで注目すべきことがらとして，作品の掲載方法が指摘される．この『佛教童謡曲譜と遊戯』では，活動初期の『日本佛教童謡集』からは一変して，全ての作品に楽譜が掲載され，また振付も掲載されるようになった．音楽作品である以上，楽譜を掲載することは，その普及には欠かせないものである．編集者の江崎がここにきて，その重要性に気づいたか，あるいは必要性を認識しつつも，それまでは経済的に実現不可能であったためかはわからないが，ここに来て曲と詞の両方が収録されることになった．しかし，さらに注目すべき点は，それらの作品に振りが付けられていることである．この振りを付けるという試みは，他では見られないもので，これを継続的に行っている[93]点は，この日本佛教童謡協會の特色といえよう．のちの仏教洋楽界において，花祭り[94]の際に，踊りつきの作品が取り上げられるようになり，同協会の賀來琢磨や同氏主宰のタンダバハ舞踊研究所[95]などが踊りの講師として派遣されていることを考えれば，同協会のこうした試みと同協会同人部によるこのジャンルにおける人材育成は，オリジナリティある活動として評価できるものである．

3.『新佛教音樂』と『佛教音樂全集』に収録された作品

第2期にはいると，既に述べたように，同協会の発表の場は『新佛教音樂』へと移り，その対象は児童だけではなく，広く一般を対象に，仏教洋楽に関する論考やニュースが掲載されるようになる．では，収録作品についてはどうだろうか．

『新佛教音樂』誌には，確認できた分で，のべ88点[96]の楽譜が収録されている．その内訳容は，同誌において明記されている区分に従って，童謡43，聖歌17，民謡9，青年歌3，児童讃歌2，俚謡1，歌謡曲1，行進曲1，讃歌1，宗教詩1，唱歌1，新民謡1，少国民歌1，記載なし6，となっている[97]．

このように，児童向けのものは童謡と児童讃歌の45点で，全体の約半数となっており，比較的他の世代に向けた作品の割合が，第1期よりも増えていることがわかる．また，これらの作品の中には，聖歌のように佛教音樂協會のような他の場所で発表された作品も含まれている．つまり，掲載作品についても，仏教洋楽全体を視野に入れていこうとする傾向が読み取れる．

また，この時期のもうひとつの刊行物であった『佛教音樂全集』では，収録された作品の殆どが，既発表曲である．こちらは，野村成仁[98]の讃仏歌を10点収録するなど，仏教洋楽界全体の作品をバランスよく収録しており，同協会が仏教洋楽全体を視野に入れている様

90）本稿末【日本佛教童謡協會関連文献】参照．
91）福本：2002参照．
92）藤井は，佛教音樂協會の京都支部で，指導者として中心的な役割を担っていた．
93）『佛教童謡曲譜と遊戯』には毎輯2～3点の振付が掲載されていた．
94）仏教の開祖である釈尊の誕生を祝う宗教イヴェント．
95）注71）参照．
96）福本：2002参照．
97）いずれも『新佛教音樂』誌掲載時の区分に基づく．
98）明治末から大正期にかけて，主に西本願寺周辺において，讃仏歌運動推進の中心的存在であった．

子を裏付ける編集となっている.

では，第1期に見られたような，日本佛教童謡協會の幼年層を対象とするオリジナリティーは，薄れていったのだろうか.

確かに，『新佛教音樂』に掲載された作品の割合を見ると，児童を対象とするものは，以前ほどのウェイトを占めておらず，さらに『佛教音樂全集』においても同様の傾向が見られるので，同協会における仏教童謡の位置づけは，単に仏教洋楽の一ジャンルとしての扱いとなっているかのように考えられる.

しかし，聖歌などの殆どが，他の組織から発表されたものであるのに対し，収録された童謡や民謡の殆どは，新作か，あるいはそうでなくとも同協会の既発表分である．またこれらの作品以外にも，『新佛教音樂』誌には楽譜こそ無いものの，同協会がこの第2期に設けた「同人部」で育成された同人による児童向け歌謡作品が，新作発表という形で掲載されている.

こうした状況を鑑みれば，この時期もやはり，同協会のオリジナリティーは，やはり童謡を中心とした児童向け作品の創作にあるといえよう.

4. 日本佛教童謡協會の仏教洋楽史における役割

以上見てきたように，日本佛教童謡協會の仏教洋楽作品における役割とは，昭和戦前期の児童向け作品創作ということになる．仏教洋楽については，明治期の仏教唱歌，大正期の讃仏歌といった流れが存在[99]する.

明治期の仏教唱歌はその名称からも，明治政府主導による唱歌運動に習ったものである．また讃仏歌については，主に日曜学校で用いられていたことが確認されている．つまり，日本佛教童謡協會設立以前の仏教洋楽とは，基本的には児童を対象としたものであり，同協会の路線は，この流れを継ぐものとして位置づけられる.

また一方で，同時期の佛教音樂協會から発表された仏教聖歌は，讃仏歌を経験した青年学生層を対象としている．つまり，日本佛教童謡協會が推進した創作活動は，対象とする層において，同協会と棲み分ける関係にあった.

この2点において，同協会の創作活動は，昭和戦前期の仏教洋楽史上，評価すべきものであると筆者は考える.

Ⅵ. 佛教音樂協會の活動停止について

『新佛教音樂』第28号の刊行後，日本佛教童謡協會の活動が事実上停止状態にあったことは，既に，第Ⅲ章において述べたとおりである．では，その要因は何であったのだろうか．それに関する資料は，現在確認されていないが，ここで2，3の推論を述べておき，今後の課題としたい.

まず，時期的に考えられるのは，戦時体制下における活動の規制である.

日本の音楽界は，戦時体制下において，他の分野と同様に組織改変がなされ，次第に挙国体制となっていった．しかし，音楽雑誌の統廃合[100]は，第1次[101]が1941年10月であり，機関誌の『新佛教音樂』が影響を受けたとは考えられない．さらに，楽壇の統合もさらに後の話である．仏教界でも，同協会の後援団体[102]であった仏教連合会が大日本仏教会に改組されるが，それも1941年の話であり，『興亞佛教國民唱歌集』は，同協会との連携の下出版されており，政府の戦時体制が，直接同協会の運営に影響しているとは考えられない.

既に述べたように，同協会の設立は，江崎を中心としたものであり，その運営も江崎の仏教童謡を中心とする「新仏教音楽」に対する思いにあった．とすれば，同協会の活動の停止は，仏教者であり，また詩人でもあった江崎を取り巻く環境の変化が，影響しているのではないだろうか.

99) 福本：2001-2，ｐｐ.16-17参照.

100) 政府指導の下，各種雑誌の統制を目的として行われた.

101) 音楽雑誌の統廃合は，2回に分けて行われた．ちなみに第2次統廃合は，2年後の1943年10月.

102) 注59) 参照.

Ⅶ. まとめ

以上，日本佛教童謡協會に関する資料から筆者が明らかにしたように，同協会の活動は，児童向け仏教洋楽作品の創作という分野において，戦前昭和期の仏教洋楽史において独自の活動を展開してきたものとして評価できよう．またその活動は，江崎の個人的な仏教童謡への思いに始まり，次第に仏教洋楽全体へとその対象範囲が広がりつつも，常に仏教童謡を中心に，当時を代表する作曲家との連携の上で展開している．このことは，仏教が今日以上に国民の生活に密接であったことや，その関連団体の組織力を考えれば，仏教洋楽というジャンルにおいて，同協会が果たした役割は，また昭和戦前期の洋楽受容においても，何らかの影響があったものと考えられる．

次稿では，佛教音樂協會とともに，仏教界が洋楽受容において果たした役割について考察していきたい．

【主要参考文献】

飛鳥寛栗．1999『それは仏教唱歌から始まった――戦前仏教洋楽事情』，樹心社．
安藤嶺丸（編）．1936『江崎小秋歌謡選集』，仏教年鑑社．
江崎小秋．1927「佛教童謡と私――『日本佛教童謡集』の序にかへて」，江崎小秋編『日本佛教童謡集』，日本佛教童謡協會，pp.1-14.
江崎小秋．1932「新佛教音樂運動拾年の跡(一)」：『新佛教音樂』第1號，日本佛教童謡協會，1932.10，pp.1-14.
江崎小秋．1936「佛教歌謡謡・音樂・舞踊史私観」：『新佛教音樂』第26號，日本佛教童謡協會，1936.10，pp.18-29.
福本康之．2001-1「『佛教音樂協會』に関する資料調査報告――佛教音樂協會発行の資料と『中外日報』紙の記事を中心に」：『国際文化論叢』創刊号，総合研究大学院大学，2001.3，pp.1-12.
福本康之．2001-2「昭和戦前期の仏教洋楽に関する一考察（Ⅰ）――「佛教音樂協會」と同協会京都支部の活動を中心に」：『環境と経営』第7巻第1号，静岡産業大学経営学会，2001.4，pp.13-31.
福本康之．2002「『日本佛教童謡協會』に関する資料調査報告――同協会発行の資料を中心に」：『国際文化論叢』第2号，総合研究大学院大学，2002.3掲載予定．

【佛教童謡協會関連文献】

江崎小秋（編）．『日本佛教童謡集』，1927，日本佛教童謡協會．
『佛教童謡曲譜と遊戯』第1輯，1929.8，日本佛教童謡協會，非売品．
『佛教童謡曲譜と遊戯』第2輯，1929.9，日本佛教童謡協會，非売品．
『佛教童謡曲譜と遊戯』第4輯，1930.2，日本佛教童謡協會．
『佛教童謡曲譜と遊戯』第5輯，1930.4，日本佛教童謡協會．
『佛教童謡曲譜と遊戯』第6輯，1930.5，日本佛教童謡協會．
『佛教童謡曲譜と遊戯』第7輯，1930.8，日本佛教童謡協會．
『佛教童謡曲譜と遊戯』第8輯，1930.9，日本佛教童謡協會．
『佛教童謡曲譜と遊戯』第2期第1輯，1930.11，日本佛教童謡協會．
『佛教童謡曲譜と遊戯』第2期第2輯，1930.12，日本佛教童謡協會．
『佛教童謡曲譜と遊戯』第2期第3輯，1931.3，日本佛教童謡協會．
『佛教童謡曲譜と遊戯』第2期第4輯，1931.7，日本佛教童謡協會．
『佛教童謡曲譜と遊戯』第2期第5輯，1931.9，日本佛教童謡協會．
『佛教童謡曲譜と遊戯』第2期第6輯，1931.12，日本佛教童謡協會．
『佛教童謡曲譜と遊戯』第2期第7輯，1932.5，日本佛教童謡協會．
『佛教童謡曲譜と遊戯』第2期第8輯，1932.12，日本佛教童謡協會．
『新佛教音樂』創刊號，1932.10，日本佛教童謡協會「新佛教音樂」刊行部．
『新佛教音樂』第2號，1933.1，日本佛教童

謠協會「新佛教音樂」刊行部.
『新佛教音樂』第3・4號，1933.3，日本佛教童謠協會「新佛教音樂」刊行部.
『新佛教音樂』第5號，1933.5，日本佛教童謠協會「新佛教音樂」刊行部.
『新佛教音樂』第6號，1933.7，日本佛教童謠協會「新佛教音樂」刊行部.
『新佛教音樂』第7號，1933.8，日本佛教童謠協會「新佛教音樂」刊行部.
『新佛教音樂』第8・9號，1933.9，日本佛教童謠協會「新佛教音樂」刊行部.
『新佛教音樂』第10號，1933.11，日本佛教童謠協會「新佛教音樂」刊行部.
『新佛教音樂』第11號，1934.1，日本佛教童謠協會「新佛教音樂」刊行部.
『新佛教音樂』第13號，1934.6，日本佛教童謠協會.
『新佛教音樂』第14號，1934.8，日本佛教童謠協會.
『新佛教音樂』第15號，1934.9，日本佛教童謠協會.
『新佛教音樂』第16號，1934.11，日本佛教童謠協會.
『新佛教音樂』第17號，1935.1，日本佛教童謠協會.
『新佛教音樂』第18號，1935.6，日本佛教童謠協會.
『新佛教音樂』第19・20號，1935.8，日本佛教童謠協會.
『新佛教音樂』第21號，1935.10，日本佛教童謠協會.
『新佛教音樂』第22號，1936.1，日本佛教童謠協會.
『新佛教音樂』第23號，1936.6，日本佛教童謠協會.
『新佛教音樂』第26號，1936.10，日本佛教童謠協會.
『新佛教音樂』第27號，1937.4，日本佛教童謠協會.
『新佛教音樂』第28號，1937.7，日本佛教童謠協會.
江崎小秋（編）.『新纂仏教幼稚園唱歌遊戯』上巻，1931.6，日本佛教童謠協會.
江崎小秋（編）.『新纂仏教幼稚園唱歌遊戯』下巻，1932.6，日本佛教童謠協會.
『佛教音樂全集』第1巻，1934.9，日本佛教童謠協會.
高楠順次郎，弘田龍太郎監輯.『佛教音樂全集』第4巻，1935.2，日本佛教童謠協會.
安藤嶺丸（編）.『江崎小秋歌謠選集』，1936，仏教年鑑社.
財團法人佛教聯合會（撰定），日本佛教童謠協會編纂.『興亞佛教國民唱歌集』，1939.12，日本佛教童謠協會.

※上記資料〈日本佛教童謠協會関連文献〉は，2001年度より，国立音楽大学附属図書館においてマイクロ・フィッシュにて閲覧可能となっている.